

◎ 単元名 戦争と向き合うことで命を見つめ、伝える言葉の力を実感し合う学習指導  
～さまざまな比べ読みを通して～

◎ 単元の目標

- ・ 極限状態に置かれたときに人々が紡ぐ「言葉」の力を実感し、表現の仕方や特徴に注意して読む。  
(「C読むこと」指導事項ウ)
- ・ 同じテーマについて書かれた現代文を比べ読み、重ね読みをすることにより、時代背景や人々の心情など、さまざまな情報がより浮き彫りになることを知り、人間としての生き方について考え、自分の意見を持つ。  
(「C読むこと」指導事項エ)

◎ 単元の学習指導計画(全11時間扱い)

- 第1次 『想う』の読解をし、「メント・モリ」(死を意識して生きる)の意味を知る。 [1時間]
- 第2次 発言広告「ボケないで、若者。」や『字のないはがき』『春望(漢詩)』をはじめとし、戦争下での暮らしの様子や、ぎりぎりの生活の中で自分の命や仲間の命を見つめて生きた人々の心情がしのばれる文章を読む(さまざまな小説・手紙・遺書・戦争体験手記など。戦地にいた人や銃後の護りにいた人、愛する仲間を失ってからも思いを寄せる人々など、さまざまな立場の人々の文章を比べ、重ねて読み、「言葉の力」を実感し合う。)。 [8時間]
- 第3次 自分が見聞きした戦争体験者の話を仲間に語ったり、戦争体験を語った文章を読んだりして、戦争下で人々がどのように自分や仲間の命を見つめて生きたかを知り、自分の考えをまとめるための情報を広げたり深めたりする。 [1時間 ※発展読書はここで行った。]
- 第4次 今までの学習や体験をいかし、具体例を選んだうえで、自分はこれからいかに生きようとするのかを文章にまとめる。(説得材料としての具体例・文章構成・パソコン入力) [1時間]

◎ この実践で教材化したもの

【既に教科書教材であるものを使用したもの】

- ① 想う(五木寛之 著)
- ② わすれられないおくりもの(スーザン・バーレイ作) (※小学校の教科書教材)
- ③ 大人になれなかった弟たちに…(米倉斉加年 作)
- ④ 字のないはがき(向田邦子 作)
- ⑤ 凧になったお母さん(野坂昭如 作)
- ⑥ 漢詩 春望(杜甫 作)
- ⑦ 碑(単元とは別に扱ったが、発展教材と考えてもよい。)
- ⑧ ヒロシマ神話(嵯峨信之 作 扱いは同上)

【私的に教材開発したもの】

- ⑨ 平成23年春の選抜高校野球大会開会式の選手宣誓(東日本大震災直後)
- ⑩ 平成23年年対抗野球 選手宣誓(東日本大震災半年後)
- ⑪ 毎日新聞 余録ほか、新聞記事や投書 多数
- ⑫ 第75回毎日広告デザイン賞第二部 発言広告最優秀賞「ボケないで、若者。」
- ⑬ 漢詩 兵車行・石壕吏(杜甫 作)
- ⑭ 関口清氏・大塚晟夫氏・板尾興市・中尾武徳氏・柳田陽一氏・吉村友男氏・上原良司氏・横山善次氏・枝幹二氏・西田高光氏・穴澤利夫氏の手紙・日記・遺書(『きけ わだつみのこえ』『英霊の言の葉』『陸軍特別攻撃隊の真実 只一筋に征く』より)
- ⑮ 山口青邨氏・北村栄馬氏・川合四郎氏・雪ノ浦テツ氏の日記・手紙(「盛岡てがみ館の展示」『英霊

の言の葉』)

- ⑩ 松尾敬宇氏を弔ったグールド少将の言葉、および松尾氏の母、まつ枝さんの短歌(遊就館の展示より)
- ⑪ 塚本太郎氏の秘密録音(NHK戦争アーカイブス他)
- ⑫ 尊厳死を選ぶか否か(アメリカの事例 ニュースより)

【私的に教材開発をし、選択できる発展読み物としての位置づけとしたもの】

「発展(読み物)」とは、全員に教材として配布はしたが、時間の関係で、全員で読む時間が取れず、読書は各自に任されたという扱いのもの。

⑬ 発展(読み物)・・・山野清子氏・西沢都彌氏・立川絹江氏の手紙・短歌(出典は『英霊の言の葉』同上)～従軍看護婦の立場からの文章～

⑭ 発展(読み物)・・・中村メイコ氏の話(『昭和二十年夏、子供たちが見た日本』より) ～子どもの立場から見た文章。戦争中でもユーモアを忘れない父と慰問に駆り出されていく子役スターの様子が描かれる。

【発展読書】・・・附属学校から太平洋戦争に関係する本を借り、本校図書館にある戦争関連本や、教材開発の中にあつて私の判断でサブ教材と位置付けたもの(例 シベリア抑留・引き揚げの苦労・様々な方の遺書)と合わせて、1時間を発展読書の時間と位置付けた。生徒は各自、興味のある資料を手にとって、読みを深めていた。この本のリストは ⑳別紙(データ)参照。

## ◎ 実践の概要

単元の初めに『想う』の読解を通して「メント・モリ」(死を想え)という思想を導入。これは人間にとって命は永遠ではなく、誰にも必ず死が訪れる。だからこそ今を充実させようという考えである。そして、東日本大震災時に溢れた言葉の中から、「私たちが生きている今日は、亡くなった方々が生きたかった今日」であること、「私たちに今できることは、精一杯に元気を出して毎日をおくること。」「生かされている命に感謝し、一生懸命生きること」であることを確認した。

『わすれられないおくりもの』と「広島原爆の語り部さんに『死にぞこない』という言葉に浴びせた中学生」の事例を比較し、「言葉の力」がプラスにもマイナスにも動くこと、その影響力の大きさを確認した。

そのうえで、たくさんの教材をどんどん重ねて読解していった。杜甫の漢詩『春望』『杜甫の古詩の史詩各種』を使い、この詩の言葉が後世に残した大きさを実感。はじめは「ボケないで、若者」という発言広告から、いかに私たちが平和ボケしているかを認識した。ここから「戦争」という背景に向けて、教材は舵を切っていくことになる。

次に、戦争を背景にしたフィクションである。一気にリアルな教材に進むのではなく、ワンクッション置くことで、戦争への心構えを持たせようとの考えからである。『大きくなれなかった弟たちに・・・』を読解したときには、「弟たち」の文字が示す一般性に発見があった。戦争の苦しさに興味が向き始めた。『凧になったお母さん』では、大空襲の恐ろしさを読んだ。生徒は「ミズミズ」という片仮名表記がもたらす影響力を実感していた。

次に、『きけわだつみの声』『無言館の青春』『横山善次氏の遺書(生徒には遺書とは告げなかった)』を中心に読み、いかに「飢え」が全体に広がり、苦しい生活であったかを知った。想像を絶することばかりで、なかなかイメージできないながらもその辛さは分かっていった。

さらに、『字のないはがき』『山口青邨氏の日記』『きけわだつみのこえ』を使い、杜甫の『春望』とつなげながら、戦時中に手紙が持つ意味の強さに気づかせていった。そのうえで、戦場から送られた、兵士である「父の手紙」と、従軍看護婦である「母の手紙」を読み比べた。検閲制度の存在を知り、ごくあたりまえな文章にこめた切なる思いを「隠れメッセージ」をいう言い方で探していった。生徒は、自由に表現できない時代であることに驚くとともに、その中でも相手に伝えたい気持ちを表現しようとする努力に感じ入っていた。また、「昔の人は言葉遣いが丁寧だ。」ということに注目した生徒もいた。

最後に、実際に戦争を体験した方々が遺した、手紙や手記、インタビュー、遺書類。そこにときどき新聞記事や投書を挟む形で、たくさんの視点が持てるようにした。そのさい、常に「命を見つめて伝える言葉の力」を分析したり意識したりするように心がけた。そうしないと、どうしても戦争の残酷さ・悲惨さ・あるいは表面的かつこよさ・政治的社会的解釈などに注目が走ってしまうからである。

中学3年生はこれまで義務教育の9年間、様々な教科で戦争に触れてきているし、国語科では毎年1つは戦争に関わる教材に触れてきた。ゆえに初めは「はいはい、戦争をやってはいけない、って言いたいんですよ。」と言わんばかりであった学習者であった。しかし、例えば検閲が厳しい中をいかに人々が思いを言葉・遺書の言葉に載せて家族や大切な人に伝えたかを読みとったり、心につきささる表現を分析していったり、死に直面した人々の言動を追体験したりするうちに、表面的な読みや勝手に断定する読みを排除し、より深く読み取ろう、言外の意味はないか考えようとする姿勢を見せるようになった。

最後には発展読書をした後、各自が学習のまとめの文章を書いた。